

保育専攻学生は「保育」をどう理解しているのか

How Do the Students of Early Childhood Care and Education Perceive “HOIKU”?

戸 江 茂 博*・久保木 亮子**・佐 藤 智 恵***

要 旨

本研究の目的は、学生たちが保育をどう理解しているのかということ明らかにすることである。研究方法は保育士養成課程で学ぶ3年次生129名を対象として、2度目の保育実習の前後で「『保育』のイメージはどのようなものか」ということについて質問紙調査を行い、学生の記述を筆者3名で分類を行った。その結果、実習前の記述は9カテゴリーに、実習後の記述は13カテゴリーに分類された。実習前後の記述の変化としては、実習前には抽象的であった記述が実習後には具体的なものに変容しており、生々しい実習経験を基に記述が行われたこと、また自らの実習での経験を重ねて記述が行われたことが考えられる。

キーワード：保育専攻学生 保育の理解 質問紙調査

I. 問題と目的

保育士養成課程で学ぶ学生は、保育をどう理解しているのだろうか。保育実践には、「保育性」（佐藤、2011）などと呼ばれるような保育者特有のものの考え方や捉え方があるとされる。このような保育者ならではの保育実践の捉え方は、どのようにして構築されていくのか。本研究では、この課題に迫るためにまず、保育士養成課程で学ぶ学生が保育実践をどう理解しているのかということに着目する。

保育の理解に関しては、子どもをどう理解しているかということから接近されている。小野（2014）は、子ども理解のためには子どもの「心」と保育者の「心」の繋がりという漠然としたものが必要であるとし、倉橋惣三がいうところの「心もち」に着目し、学生が実践を観察して記述したレポート15編を詳細に分析した。その結果、「心もち」を自然と理解しているのは一部の学生であり、多くの学生にとっては困難な事項であったことを述べている。学生にとっ

* 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 教授

** 神戸親和女子大学 発達教育学部 福祉臨床学科 教授

*** 神戸親和女子大学 発達教育学部 福祉臨床学科 准教授

ては、保育実践を理解すること、つまり保育者としての視点を持つこと以前に子どもの姿を捉えることが困難であることがうかがえる。このことについては、山崎ら（2012）も、保育者養成校で学ぶ学生たちの子ども理解ノートの記述を分析し、学生の子ども理解には「子どもへの興味づけ」、「子どもの内面への理解」、「保育者としての視点」という3段階があることを報告している。同様に、中藤ら（2015）は環境構成に着目し、学生たちの環境構成を捉える視野の狭さや子どもの様子を捉えることの困難さから生じる環境構成力の弱さがあったことを指摘している。このように、様々な先行研究により学生たちには子どもの姿を理解することへの難しさがあることが明らかになっている。

それでは、子ども理解の側面以外では、どのような理解をしているのか。学生の保育理解や子ども理解の場として、保育実習が挙げられる。谷川（2010）は、実習経験における保育の認識の変化について、リアリティ・ショック（職業への理想と職場の現実の間に生じるずれ）から検討を行った。その結果、リアリティ・ショックを伴う学生の認識の変容には「子ども理解の発展」というプロセスを経るものと、「ショックからの回避」というプロセスを経るものがあることを見出し、どちらのプロセスをたどるかは、実習先の保育者との出会いの在り方に規定されていることを指摘している。

学生にとっては、実際の保育に触れることのできる保育実習での経験は、自らの考え方を変容させるほどの大きな契機となると言える。高濱ら（2015）は実習を1度だけ経験した1年次生に対して保育実践のビデオ視聴を行っている。その結果、特に観る視点を示さずに提示した場合、表面的な気づきに終始する傾向があったこと、子どもの行動には心の動きが関連していることを説明した後は詳細な動きに着目可能になるなどの変化があったことを述べている。このことから、一度だけの実習経験では、保育理解の視点を保持することは困難だということうかがえる。

そこで本研究では、2回の保育実習を経験した学生を対象として、学生たちが保育をどう理解しているのかということ明らかにすることを目的とする。

II. 方法

A大学保育士養成課程で学ぶ3年次生129名を対象として、保育実習の前後で2回質問紙調査を行った。対象の学生は、前年度に保育実習指導Iと保育実習Iを修得後、保育実習IIを選択している。調査時期については、1回目は保育実習の開始2か月前の2016年6月、2回目は保育実習終了後1か月程度経た2016年10月であった。両調査とも保育実習指導IIの授業内で行った（回収率100%）。質問内容は、（1）保育において一番大切だと思うことは何か、（2）あなたはどんな保育者になりたいか、（3）「保育」のイメージはどのようなものか、（4）あなたにとって「保育」とはなにか、の4点をB5サイズ（白紙）に記述させた。また、記述内容が保育実習指導などの成績には一切無関係であることを周知し、自由に記述が行えるように

配慮した。

分析は、学生の記述を教員3名で質的検討を行った。なお3名の分析者は、それぞれ長く保育実践を行った経験があったり、保育・幼児教育の研究を行ったりしており、保育実践というものに関してある一定の理解がある。

分析の具体方法としては、初めに学生が記述したものを実習前後に分け、全てデータ入力・印刷し記述カードを作成した。次に、記述カードに書かれた内容を分析者3名が熟読し、類似したものをカテゴリーごとに分類した。最後にカテゴリーごとに再度検討し、分類をやり直すという過程を経て、カテゴリー名をつけた。同時に、実習の経験を経ることで記述がどのように変化したか（或いは変化しなかったか）という点に接近するために、個人の記述の差異についても検討を行う。分析の日時は、2016年7月と12月の計6時間である。

なお本稿では、紙面の関係上、問3『「保育」のイメージはどのようなものか』ということに焦点をあて報告を行う。

Ⅲ. 結果および考察

(1) 保育実習前に記述した内容の分析

分析の結果、カテゴリーA「子どもが何かを身につけること (21)」、カテゴリーB「見守ること (20)」、カテゴリーC「保育職のイメージ (18)」、カテゴリーD「温かみ (17)」、カテゴリーE「遊びや環境によって行うもの (14)」、カテゴリーF「子どもの心身の発達 (14)」、カテゴリーG「養護・生命 (12)」、カテゴリーH「第2の親 (7)」、カテゴリーI「自分も成長するもの (6)」の9カテゴリーに分類された(カテゴリーの括弧内の数字は、記述した人数)。各カテゴリーの具体的な記述は、以下の通りである。

カテゴリーA【子どもが何かを身につけること】:「子どもを預かり育てる。親のような先生の保育者の元で、基本的な生活習慣も身につけることができる。0～6歳という広い年代を保育する。」「生きていく上で必要な力を身につける。子どもの想像力や発想力を高める。」「遊びを通して5領域を身につける。」「遊びを通して様々なことを知ったり、感じたりすること。」

カテゴリーB【見守る】:「生まれてから小学校就学まで子どもの生活をよく見守り、支援するイメージ。話すことができない乳児期の際に、泣いていたりすると、どうして泣いているのか気持ちを理解することができず、辛かったり大変だと感じてしまう。」「子どものあらゆる目芽えを温かく見守る。(原文ママ)」「子どもたちが生まれて初めての集団生活を行う場所で、成長を見守り、子ども達にとっての素敵な思い出を作る場所。」

カテゴリーC【保育職のイメージ】:「大変だけど、子どもの成長を近くで見守ることができるやりがいのある仕事というイメージ。」「責任のあるもの。」

カテゴリーD【温かみ】:「愛情を注ぐというイメージを持っている。どんな場面でも子ども一人一人に愛をこめて接することが印象的。」「具体的ではないのだが、あたたかかったり、明

るかったり、楽しいというイメージが浮かぶ。保育者のあたたかみ、明るさ、楽しい気持ちに子どもが包まれているイメージ。」「保育のイメージは温かいもの。保育者と子どもの間には必ず愛情や信頼感があるものだと考えているから。」

カテゴリーE **【遊びや環境によって行うもの】**：「子どもをただ預かるだけでなく、常にいのちも預かっている場所であり、子どもたちがのびのびと過ごせる環境を提供するというイメージ。」「遊びを通して子どもの感性を豊かにしたり、健康で安全に過ごせるような環境を整える。」

カテゴリーF **【子どもの心身の発達】**：「子どもの成長する段階で、人格形成をする上で必要なものだと思う。内面を育てるもの。」「子どもたちの生活の基礎となる生活を作る。遊びを通して、どんなものが得られるか考える。子どもの将来のために必要なつながり、人格形成をしていく場所。」

カテゴリーG **【養護・生命】**：「子どものいのちを預かり、親が安心して過ごせる環境を作ること。」「子どものいのちを預かり、様々な経験を通して心身ともに成長する。」「健康で安全に過ごせるような環境を整える。」

カテゴリーH **【第2の親】**：「第2のお母さんという子どもが安心できる場所で、元気にすくすく育ち、身体的、精神的に保てるようにするイメージがある。」「2つ目の家のようなもの。そのくらい子どもや保護者に大きな影響がある。成長に大きくつながる。」

カテゴリーI **【自分も成長するもの】**：「子ども達を育てるだけでなく、保育者や周りの大人、みんなが成長するものだと考える。」「保育は子どもに寄り添い気持ちや発達を理解しながら、ともに成長していくこと。」

まず、カテゴリーA **【子どもが何かを身につけること】**に21の記述があることが注目される。保育実習前での記述内容においては、学習成果から乳幼児期の保育・教育の特徴は遊びや生活を通して習得すべきこと、生活教育が中心となって生きていく力を培うものであると感じ、「【5領域】を考えている」という保育指針のねらいが含有されていることも見逃せない。

次にカテゴリーB **【見守る】**とカテゴリーC **【保育職のイメージ】**、カテゴリーD **【温かみ】**を合わせて考えてみる。カテゴリーBとC、Dからは、保育者が温かく寄り添い、子どもの健やかな成長を支えるために慈愛に満ちた心とまなざしが必要であると感じ取っているように思われる。保育のイメージは、子どもと一緒に生活や遊びを通して成長を温かく見守ることであるが、職業として捉えた際には、小さい時からの憧れ、責任ある仕事と捉えているようである。学生たちの記述からは、保育が温かな営みであり、保育職の責任や子どもの成長を支える役割であることを理解している様子が読み取れる。これは講義や保育実習Iでの経験などから学んだことであると思われる。しかし、なんとなく保育者という職業に憧れている、子どもと一日中楽しく遊んでいるだけでよいと安易に思っている学生もいる事が想像される。また、保育者

の人権意識、倫理観については記述されていなかった。この点は、保育を志す者にとって欠かすことの出来ない問題であり、今後の教授方法の改善を検討すべきだと考える。

カテゴリーE【遊びや環境によって行うもの】であるが、学生は保育者が安全なスペースや空間、豊かな環境構成、保育の見直しから再構成をすることによって、子どもが生活や遊びを通して成長することを1回目の実習経験やさまざまな講義から学んでいることが考えられる。

カテゴリーF【子どもの心身の発達】とカテゴリーG【養護・生命】を合わせて考えてみる。「健康で安全に過ごせるような環境を整える」の記述からは、「健康で安全に過ごせる環境が必要」と捉えているものが相当数存在していることがうかがえた。アンケート調査結果の中に「1つの答えがあるわけでないから書くのは難しいが（後略）」と記述した学生がわずかに1名存在した。この学生は、保育実践が短い言葉で現わすことが困難であることや、複雑な事象であること、子ども達の人格形成の基礎を培うこと、保育者の専門性についての責任の重さを感じ取っているのではないかと考えられる。その困難さを意識化したり言語化したりすることにはまだ難しさがあるのではないだろうか。

カテゴリーH【第2の親】について考えてみる。「家庭で育つ子どもと同じ様に、一人ひとりと愛着関係を育む」ことは非常に大切である。しかし、学生の実習ふり返りからも未満児保育における担当制保育が浸透しているとは言えない。各保育所での人的、物的環境、共通理解の困難さから実施しづらい現状があると思われる。そのような中でも学生たちは、保育者が親同様の役割を担っていると感じる経験をしてきたことが考えられる。

カテゴリーI【自分も成長するもの】について考えてみる。保育者のキャリア形成である。学生自身、生涯における成長を培うことの重要性は理解しているが、中々生涯の仕事として続けられない現実を社会的な背景、保育行政のあり方と共に考えていきたい。そして、学生が感じている「保育」について明らかにしていきたい。学生たちの記述からは、保育が温かな営みであり、保育職の責任や子どもの成長を支える役割であることを理解している様子が読み取れる。これは講義や保育実習Iでの経験などから学んだことであると思われる。しかし、保育者をめざす学生の中には、ボランティアなどで子どもと関わった経験がある、かわいいと思うがどのように関わってよいのか分からない、なんとなく保育者という職業にあこがれているだけ、子どもと一日中楽しく遊んでいるだけでよいと安易に思っている学生も存在していることが考えられる。また、どこかで耳にしたことのあるような言葉を用いて記述していることや、表層的な理解に留まっている可能性も考えられる。

(2) 保育実習後に記述した内容の分析

保育実習後に記述した内容の分析を行った結果、次の13のカテゴリーを得た。カテゴリーA「子どもと一緒に(15)」、カテゴリーB「職業観(14)」、カテゴリーC「環境(5)」、カテゴリーD「養育(15)」、カテゴリーE「学び(5)」、カテゴリーF「温かみ(4)」、カテゴリーG「養

護と教育（6）」、カテゴリーH「見守る（10）」、カテゴリーI「成長発達（6）」、カテゴリーJ「援助（15）」、カテゴリーK「家庭との連携（6）」、カテゴリーL「生活（10）」、カテゴリーM「遊び（10）」、カテゴリーN「第2の家（6）」である。なお、（ ）内の数字は、記述した人数である。各カテゴリーの具体的な記述内容を例示すると、以下の通りである。

カテゴリーA【子どもと一緒に】：「子どもに寄り添いながら、一緒に活動を進めていくこと。」「子どもに寄り添う。子どもと一緒に成長していく。」「子どもの『生活』の一部を共に過ごすこと。」「子どもと一緒に園で生活を送り、子どもが安心して楽しく過ごすことが出来るようにすること。子ども全体を観察しつつ、一緒に楽しく遊ぶこと。」「子どもと一緒に一日の大半を過ごす仕事。子どものいのちを預かる仕事。」

カテゴリーB【職業観】：「共同養育の一つのサービス。」「子どもが楽しめるような活動を考えたり、準備をしたり子どもをまとめたり、大変なこともあるけれど、その分子どもたちの笑顔を見れたり成長を感じられる仕事。」「子どもの一生に関わるとても大事なこと。」「形はないが中身が詰まって今後の人生にとって大切なもの。」「メンタルを強く持ち、常に子どもたちと向き合い、体力をたくさん使うイメージ。」

カテゴリーC【環境】：「子どもの生活の一つでもあり保育をする側は安心できる環境を提供するべき。」「ただ子どもの生活のお世話をするだけではなく、子どもが様々な経験・学びが得られるよう、保育者の関わりや環境構成を整える様なイメージがあります。」

カテゴリーD【養育】：「子どもたちを養護し、日常生活の援助をすること。」「子どもを保護し育成する。人格形成に大切な幼児期に子どもたちを養育すること。」「集団生活において、子どもを養育する。」

カテゴリーE【学び】：「子どもが成長するために、必要なことや、身に付けることを学ばせる場だと思っています。」「遊びや保育所の一日の流れの中で5領域を深めていく。」

カテゴリーF【温かみ】：「あたたかさがあるイメージ。」「優しい気持ちで子どもと接する場面を実習で何度も見たので、温かいイメージがあります。」

カテゴリーG【養護と教育】：「子どもの養護と教育を行うこと。」「保育というのは養護と教育の面から子どもを援助していくというイメージです。」「子どもの生活の援助をしながら成長できるよう教育すること。」「教育より幅広く子どもたちを保護しながら育成を見届けるイメージです。」

カテゴリーH【見守る】：「子どもの成長を見守りながら、手伝っていくというイメージ。」「子どもの成長を共に見守る事だと思っています。子どもの安全面もしっかり考えるものだと思います。」「子どもを温かく包み込む、受け止める。見守り育てる。」「地域や保育者と連携して子どもの成長を見守り、その援助をしていく。」

カテゴリーI【成長発達】：「子どもと密に関わる事が出来て、子どもの発達に合わせた援助をしたりするイメージです。」「子ども一人ひとりの成長を、園での生活や遊びを通して助長

していくこと。』、「乳幼児期の子どもの成長に関わる重要なもの。』

カテゴリーJ【援助】：「子どもが園で生活する中で必要な援助をすることだと思います。』、「子どもが心身共に成長できるように、環境や関わりなどを総合的に援助することが保育のイメージです。』、「一つ一つの活動に意図やねらいを定めて、子どもへの願いを持って援助すること。』、「子どもが心身共に健やかに発達できるように密接に関わり適切な援助を行うこと。』、「子どもたち、保護者の生活の手助け。』

カテゴリーK【家庭との連携】：「家庭と連携して子どもを育てていく大切なことというイメージ。』、「子どもを育て守る、また、子どもの成長する様子を見守るだけではなく、子どもに関わる保護者も支援するイメージ。』

カテゴリーL【生活】：「子どもを守りながら生活すること。』、「子どもの身体の発達や社会性を生活を通して身に付けさせること。』、「集団生活を身に付けたり、基本的な生活習慣を身に付ける場所である。』、「子どもと一日の生活を送りながら見守り援助すること。』

カテゴリーM【遊び】：「教えるということではなく、子どもに生活や遊びを通して、生きていく中で必要な物事を身に付けていくことが出来るように支援すること。』（注：「遊びと生活」を切り離せないものとして記述しているものが二つあったが、便宜上、「遊び」のカテゴリーに配した。）「子どもたちに生きていく上で必要な力を遊びの中で身に付けられるようにするというイメージがあります。』、「子どもが身に付けるべきことを遊びの中で総合的に取り入れられるようにすること。その時の子どもの姿、興味に合わせて考える。』

カテゴリーN【第2の家】：「親代わりとなって、一日の生活が充実したものとなるよう、配慮すること。』、「家庭とは違った場所で保護者の代わりに子どもを育てること。』、「仕事で忙しい両親に代わって保育するというイメージ。』、「第2の家で第二のお父さんお母さんがいること。』

まず、カテゴリーA【子どもと一緒に】に15の記述があることが注目される。保育実習前に記述した内容においては、「子どもと一緒に」という表現は散見されるものの、他の要素も混在したりしてカテゴリーとしてまとめることはできなかった。例えば、保育実習前においては「子どもと一緒に楽しく遊ぶ」という記述がみられるが、これは「遊び」のカテゴリーに含み込んでいる。例示しているように、保育実習後においては、「子どもと一緒に」に力点が置かれている記述が多く見られた。実習を通して実際に保育に触れたとき、保育においては、常に保育者が子どものそばに、傍らにいるということ、保育者がつねに子どもと一緒に動いているということに、改めて気付いたものと推察される。実習生は実際の保育も体験するが、その際にも、常に自分の周りに子どもたちがいることに気付かされたものと思われる。つねに子どもと一緒に存在していること、子どもの傍らに居ること、これは確かに乳幼児期の教育の特筆すべき特徴である。小学校以上の教育においては、原則として教師は子どもたちに対面する。教師対子どもという図式が一般的である。教育の方法においては、この図式は教授と学習という

相互作用の営みとして定式化されるのである。

ここで保育という熟字を構成する「保」という言葉の語源的な意味に注目してもよからう。「保」は、親が（大人が）子どもをおんぶしている姿を表現した象形文字である。すなわち、親や大人が子どもと一緒にいる、子どもとともにある、ということである。したがって、「子どもと一緒に」を保育のイメージとして意識したということは、保育の実際を観察、体験して、保育の本質を直観的に掴んだ記述と考えることができる。

カテゴリ B【職業観】であるが、保育のイメージを問うた結果として、職業を意識した14の記述が見られ、しかも具体的な仕事内容を伴った記述がなされている。これも、保育を実際に見て、体験したという事が影響しているものと考えられる。自分の将来の姿を強く意識し、自分自身が身を置く場として保育所を、保育をイメージし、仕事をしている自分を想定した結果と考えられる。

カテゴリ C【環境】であるが、環境による教育は乳幼児の教育の特性の一つとされており、授業で学んだり、実際の保育を見て意識化された結果とみることができる。例示に「ただ子どもの生活のお世話をするだけではなく、子どもが様々な経験・学びが得られるよう、保育者の関わりや環境構成を整える様なイメージがあります。」と言われているように、少数であるが、保育とは環境に始まって環境に終わるものだ、保育とはとどのつまり環境なのだということを感じたものと思われる。保育の深みを看取した記述である。

カテゴリ D【養育】と G【養護と教育】、H【見守る】、L【生活】を合わせて考えてみる。関連性のあるカテゴリであり、幼稚園では見られにくい保育所の特徴と考えられるものである。これらを合わせて41回答であり、全回答数の3割以上（約32%）を占める。保育所保育の特徴は、保育時間が長いこと、いのちを守り、いのちを養うことが第一義にあること、生活面の育ちが重んじられていることなどが考えられる。カテゴリ D、G、H、Lは、このような保育所の保育の特徴に密接に関連しているものである。いわゆる養育や養護にまとめられる項目であるが、保育所での実習体験後に、保育所保育のあり方、あり様が学生の中に浸透してきているものと思われる。保護や養護、養いや養育、そして生活援助は、子どもへのケアを本分とする保育所の本質的な営みである。

とりわけ、「子どもの情緒の安定など気持ちに寄り添い、安心して過ごせるようにすること。」、「子どもを保護し育成する。人格形成に大切な幼児期に子どもたちを養育すること。」、「子どもの生活の援助をしながら成長できるよう教育すること。」、「教育より幅広く子どもたちを保護しながら育成を見届けるイメージです。」などの例示は、保育所保育の本質を喝破したものと考えることができる。

カテゴリ I【成長発達】、E【学び】、J【援助】、M【遊び】を連結して考えてみる。これら合わせて36回答あり、全回答数の3割近く（約28%）を占める。これらは、保育所における「教育」を意識したものと考えられるが、次の例示に典型的に表れているように、生活や生

活感が漂う中で遊びを通して行われる保育であること、保育は指導ではなく援助であることが語られている。「子ども一人ひとりの成長を、園での生活や遊びを通して助長していくこと。」(再掲)、「教えるということではなく、子どもに生活や遊びを通して、…(中略)…支援すること。」(再掲)、「遊びや保育所の一日の流れの中で5領域を深めていく。」(再掲)、「時間が流れるように生活が流れていくイメージです。また、子どもたち自身が考えて動く時間を与え、将来のために身になるような支援をするイメージです。」

少数ではあったが、カテゴリーF「温かみ」、K「家庭との連携」、N「第2の家」について考えてみる。「温かみ」は、保育実習前のイメージでは、上位を占めるカテゴリーであった。保育所は家のようなところ、家庭から離されて寂しい思いをする子どもに対して優しいケアをするところ、というイメージを、実習前の学生はある種の期待感をもって抱いていたのではないと思われる。しかし、実習後では、実際に見た保育所、実際に体験した保育を思い返して、多様な業務に忙殺される保育所の日常の姿が、がんらい維持されているはずの「温かみ」を隠蔽してしまったのではなかろうか。

この「温かみ」は、カテゴリーN「第2の家」につながる。「親代わり」、「保護者の代わりに」、「両親に代わって」、「第二のお父さんお母さん」などの記述がある。「第2の家」は幼稚園のイメージには登場しないものであろう。保育所独自のものと考えられる。保育職の専門性の観点からは、このようなイメージが沸き上がることに違和感を禁じ得ないが、実態としての保育所保育、家庭との関係性から見た視点では、根強く学生のイメージに残るものと推察される。

最後に、カテゴリーK「家庭との連携」であるが、保育実習前には、カテゴリー化されることもなく、出現数もほとんどなかった項目である。これも、実習体験が大いに影響しているものと考えられる。例示の中の「子どもに関わる保護者も支援するイメージ」に典型的に表れているように、保護者支援を保育所の業務として意識化した記述と思われる。実習体験後の学生の意識の高さが感じられる。

(3) 実習前後の記述の比較

実習前後の記述の変化としては、実習前には抽象的であった記述が実習後には具体的なものに変容している点が挙げられる。これは実習後の記述が、実習終了直後であったことから、生々しい実習経験を基に記述が行われたこと、また自らの実習での経験を重ねて記述が行われたことが考えられる。また、実習後には「自らの成長」に言及した記述が極端に減少している。実習前の記述は、「保育実践を行うことで成長できる」という単なる理想としての自らの姿が想起されていたが、2週間の実習後には、保育者として成長するということは容易ではなく、簡単に言及できないといった感覚を保持したものと思われる。2度目の実習を通して、保育実践に潜む困難さを理解するとともに、自ら成長することの難しさを実感することができたと言える。

次に、実習経験が学生の「保育」理解にどのような影響を及ぼしたかという点について、記述内容の実習前後での変容について、個人内の変化に焦点をあてて検討を行った。まずは実習の経験を経てもあまり記述に変容が見られなかったグループである。学生Aは実習前には「保育者の温かみ、明るさ、楽しい気持ちに子どもが包まれているイメージ」と記述し、実習後には「子どもを温かく包み込み、受け止める」とイメージしている。学生Bは実習前には「第二のお母さんの存在」とイメージしており、実習後にも「第2の家で第二のお父さんお母さんがいること」と捉えている。あまり変容のなかったグループの記述には、「子どもの成長を見守り促す」、「子どもの気持ちに寄り添い、毎日の生活の中で援助していくもの」などの内容を記述したものが多く存在した。このグループは、「保育」というものを大きな範疇で括り捉えており、自らが実習で経験した個別具体的な保育実践エピソードを基に記述されてはいないことが推測される。彼らの記述は間違いではないものの、大学の講義において教科書で学んでいるような内容に終始していると言える。ここからは、自らが経験した具体的なエピソードから想起して記述するということがまだ困難であり、実習での経験を「語る」ほど、自己の経験を深化させることはできていないと言える。そのため、実習の経験を経てもその記述に変容するということはあまり考えられない。

一方でこれは、保育実習指導Ⅱの事後指導時に記述させたものであることが何らかの影響を及ぼしているかもしれない。この記述は保育実習や実習指導の成績には影響をしないことを伝えているものの、学生たちは、無意識のうちに自身の評価につながると捉えて、保育に関する一般的なことしか記述できなかったという可能性が考えられる。加えて、ほとんどの学生が保育実習ⅠとⅡが同一の実習先であるために、それぞれの保育観などを揺るがすような大きな保育内容や環境の変化がなかったことも要因の1つとして挙げられる。

次に、実習前後の記述内容に何らかの変化が見られたグループである。学生Cは実習前には「仕事などで子どもの保育ができない親の代わりに保育すること」というように大変あっさりとした、いわば保育に関する学習経験がなくとも記述できるような内容を記述していた。ところが、実習後の記述には「大変だがやりがいのあること」という内容に変容している。学生Cには2回目の実習で保育職にやりがいを感じることでできる何らかの経験があったと思われる。このイメージの変化について、学生Cに話を聞いたところ「先生方は毎日、本当に丁寧に子どもを保育されていたので。保育所は時間も長いですし、でも、ただ『見ている』だけでなかった。一人ひとり丁寧に保育されている。授業でそういうのを聞いてたけど、今回の実習ではそれを実感しました。『一人ひとりを大切に』っていうのを。子どものちょっとした気持ちに気づいているのが分かって。あ～気づいてというか、気持ちを分かろうとされている、という感じかな。(保育実習)Ⅰの時は、そこまで見る余裕がなかった。自分自身に。」というように語りが見られた。

学生Cは前年度に保育実習Ⅰを行った同じ園で保育実習Ⅱを経験している。一度目の実習で

は、それほど深く保育を理解することはできなかったが、翌年、同じ園で実習したことにより、ある程度慣れた環境であったために深く洞察することが可能になったと考えられる。保育実践には保育所保育指針という守るべきガイドラインがあるものの、それぞれの園によって理念や目標、保育方法が異なっている場合がある。学生は、同じ園で実習を行うことにより、保育実践への理解の深まりや自己の視点の変化に気付けるのかもしれない。

学生Dは「第2のお母さんという子どもが安心できる場所で、元気にすくすく育ち、身体的、精神的に保てるようにするイメージ」と実習前に記述しており、実習後には「子どもの様子は日々変化するので、保育者の対応もそれに合わせて行動しなければならないから『保育』は難しいと思う」と述べている。ここからは、実習後には保育実践の中に潜む困難さについての気づきがあったことがうかがえる。それはただ単に、「自分ができないこと」から生起する困難さではなく、「子どもの状態に合わせて行うことの難しさ」に言及したものであり、保育者が持つ高度な保育技術への気づきや、保育実践の複雑な様相を理解していることが考えられる。学生Dはこのことについて「う～ん、保育は子どもの状態に合わせてやるのが基本だと思うから。だから難しいし。単に何かを前で教えるだけやったら、(自分も)出来るようになると思うけど、子どもそれぞれにあわせてというのが難しい。けど、出来たらいいなあと。」のように語った。学生Dは、出来ない自分に向き合うことで否定的な心情に陥ってはならず、むしろそのことは保育の専門性を感じる行為となったようだ。保育者養成においては、学生にとって理解困難だと思われる保育行為を「できない・分からない」という理由で諦めてしまうのではなく、学生Dのように長期的な視野のもと、「保育者になろう」とする姿勢が持てることは重要である。学生が保育の困難さに直面した際に、その困難さを感じ取ることができたことを、自らの成長として受け止められるような実習指導を検討していくことも必要であろう。加えて、実習指導において、保育の楽しさや子どもたちと一緒に保育を作り上げていく喜び、やりがいを持てるようにするにはどのように指導していけばよいのか、学生に答えを与えるのではなく、一緒に考え学生一人ひとりの学びにつなげていきたい。また、実習園でのトラブル、実習中断なども起こっている状態を踏まえ、養成校として学生たちへのいのちの尊さや一般常識、倫理観を身に付けさせ、実習での確かな学び、学生一人ひとりの達成感につなげていくことが重要である。

本研究の結果から、実習における学生の様々な学びがあることが浮かび上がった。学生は自身の経験や考え方を基盤として、「保育」の理解を深め、保育者になろうとしている。理解が難しく、容易ではない保育実践に潜む豊かな子どもとの相互作用を教授していく実習指導について今後も検討を行っていく。

引用文献

- 小野順子（2014）保育者養成校学生における「子ども理解」に関する研究：幼児の「心もち」に触れるための実践方法を探る．中国学園紀要（13），pp.45-54
- 佐藤智恵（2011）自己エスノグラフィーによる「保育性」の分析：「語られなかった」保育を枠組みとして．保育学研究 49（1），pp.40-50
- 高濱正文・阿部敬信・佐藤慶子（2015）遊びの中で子どもは何を学んでいるのか：保育実践のビデオ映像を基に学びを深める．別府大学短期大学部紀要（34），pp.31-42.
- 谷川夏実（2010）幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容．保育学研究 48（2），pp.202-212.
- 中藤広美・鷺野彰子（2015）実習前教育における学生教育の課題と方法：環境構成に関する学生の理解状況を踏まえて．福岡県立大学人間社会学部紀要 24（1），pp.17-31.
- 山崎征子・小田義隆・上村晶（2012）保育学生の子ども理解を育む取り組みに関する一考察（2）—子ども発見ノートを中心に—．高田短期大学紀要 30,pp.107-116.